漢詩神奈川

第　10　号
神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢
3－39－9
TEL－FAX
045-361-2033
発行人　中山　清
編集人　田原健一

平成二十三年度連盟総会　開かる

目出度く五周年を迎える

平成二十三年五月十八日(金)午後一時より、色鮮やかな薔薇が満開の港の見える丘公園の「神奈川近代文学館」大ホールに於いて二十三年度の神奈川県漢詩連盟総会が、出席者総勢七十八名の下に開催された。

冒頭、中山会長から本年十月を以って連盟が目出度く創立五周年を迎え、これを期に連盟の益々の発展を願って、役員体制の大幅な刷新を行う旨のお話があった。

次いで、田原事務局長から、今後の新体制の詳細についての提案、更には、二十二年度の活動状況報告、決算報告及び二十三年度の活動計画、予算計画が報告され何れも満場一致で承認された。

一、人事運営体制について

(一)中山会長及び田原事務局長は平成二十三年十月十四日を以って退任する

(二)後任の新会長は　岡崎満義氏(現副会長)、　新事務局長は桜庭慎吾氏(現執行理事)

(三)十月十四日までを引継ぎ期間とする

(四)連盟の諸活動を円滑にし、より活性化する為に、運営委員会制度を導入する。

運営委員は次の六名とする

川上修己　高津有二　中島龍一

三村公二　吉岡昭夫　室橋幸子

二、二十二年度決算　及び　二十三年度予算

(11ページ記載)

総会議事終了後には石川先生による「自然を詠う」と題しての楽しく、含蓄のある講演が行われた。この詳細は4ページに記載されています。

この後、場所を「ホテルポートヒル」に移して賑やかに懇親会が開催され六十一名の参加をみました。

皆さんのご挨拶の後、石川先生、窪寺先生から総会を祝っての詩が発表された。

神奈川県連総会有感　　石川岳堂

緑樹風清初夏時　　相州今日有佳期

鷗盟集處説無盡　　山水田園陶謝詩

遊横浜港見丘公園　　窪寺貫道

南薫度港到晴丘　　依舊薔薇芬郁周

愉景騒人又蜂蝶　　花間來往共爲儔

この二つの詩を何時ものように住田笛雄監事が自慢の喉で朗々と吟じ拍手喝采をあびた。続いて各代表者のご挨拶、詩吟などの余興と続き、最高の盛り上がりの下に、5周年記念総会の懇親会はお開きになった。

尚、席上、創立5周年を記念して発刊した漢詩集『神奈川清韻』の合評会が実施された。石川、窪寺両先生のご講評と、役員の皆さんの投票により選ばれた優秀作品の発表と表彰があった。合評会の詳細は3ページ記事をご覧下さい。

(三村記)

五周年から十周年へ向かって

これまでに出来た事　これからしたい事

岡崎　満義

神奈川県漢詩連盟は今年で、創立五周年を迎えました。そのささやかな記念碑として、会員八十八人の作品を集めた「神奈川清韻」を刊行することが出来ました。昨秋から数回、執行理事と編集委員が集まり作品の検討、編集、パソコンによる文字入力などの作業を進め、無事発行にこぎつけました。

振り返ってみると、こんなにスムーズに「神奈川清韻」刊行作業が出来たのは、此の五年間、毎年春に六回、秋に一回の新人入門講座が開けたことで、神漢連の人的組織的基礎がしっかり固まったからこそです。中山清会長の厳しい講義　田原健一事務局長のキメ細かなフォローがあって、途中で脱落する人もきわめて少なく、神漢連の会員となってもらう事ができました。

入門講座を無事卒業した人は年度ごとに吟社を作り、アドバイザー役の理事も加わって、二ヶ月に一回ずつの勉強会が続いています。これがよかった。メンバーの交流がより深まったのです。

それと平行して、会員の研修会(選句方式の導入)を春秋各一回、吟行会も年一回、欠かさずに続け会員相互のなごやかな交流が年々進化してきました。

このような活動があって、神漢連の基礎固めは順調に進んできました。此の基礎、土台作りは今後とも手抜きすることなく続けていかなくてはなりません。自分も漢詩を作ってみようという“新人”への呼びかけとして、神奈川新聞や朝日新聞などへの情報提供、またもっと直接的に書道や吟詠のグループへの働きかけを更に強化したいと思います。

五年間の成果を確かめながら、新しい活動も加えていきたいと思います。例えば、いきなりの漢詩実作のハードルは高い、と思う人には漢詩鑑賞コースを作ってみる。また、中国語で漢詩を読む講座も可能でしょう。そのような漢詩教養講座が定着してくれば、地域の小学校、中学校、高等学校にも総合学習の一つとして提案できるかもしれません。同様に生涯学習に力を入れる自治体とも、提携できるチャンスともなりそうな気がします。一挙に手を広げることは出来ませんが、一年に一つ新しい事業をプラスしていくように出来ないかと思います。

もうひとつ、地元の神奈川新聞となんとか太いパイプを作れないものか、と考えます。「南信州新聞」には漢詩の常設欄(地元の漢詩紀行と過去、現在の作品)が二つもあります。どの新聞にも俳句、短歌欄はあるので、その半分でも漢詩登場の場を設けてもらえないかと願っています。

時代は猛スピードで超少子高齢化社会へと向かっています。ということは、世界一の長寿社会ということです。かって、一身にして二世を生きる、そんな大才能人がいましたが、今や誰もがそのように生きる、いや、生きざるを得ない時代になりました。

新しいアマチュアの時代が来たと捉えています。プロになる必要は無い、プロにならない楽しみがアマチュアにはあります。アマチュアはプロの予備軍ではなく、新しい価値を楽しみながら模索するライフスタイルを持つはずです。

神奈川県漢詩連盟もそんなアマチュアの組織であり続けたいと思っています。

次期事務局長に推されて

桜庭　慎吾

平成十八年に発足した神奈川県連は、中山清会長の良き指導のもと、田原健一事務局長の精力的な献身により、活発な諸活動の展開が図られ、会員数もこの五年間に三倍近くに増加し全国の県連の中においても大きな躍進の足跡を遺されたことに深堪の敬意を表します。

今回はからずも事務局長職の後任に推されましたが、前記の様な運営委員制度の導入により役員、運営委員が一体となって諸活動が推進されることが確認されました。

神奈川県連の活動の特徴は前任者の布かれた“新人研修会”を初めとする各種研修会等のユニークな活動によって示されておりますが、この路線をさらに強化することによって、私共の県連の活動の一層の充実と会員の増強に努めてまいりたいと存じます。会員各位におかれましては一層のご支持とご鞭撻をお願い申し上げる次第であります。

運営委員制度の導入にあたって

三上光敏

この度、これからの神奈川漢詩連盟(以降、神漢連)の運営にあたって運営委員制度が導入されました。ここでは導入の経過や狙いをご説明して、会員の皆様の一層のご協力をいただく一助にしたいと思います。

現在、神漢連の会員は五月十八日現在、百六十一名ですが、今後は当然ですが 更なる会員増を期待しております。発足当時のように会員が少人数のときはその運営は極力少人数(出来ればひとり)での運営が、現実的であり又効率的でありました。しかし、会員数が多くなる過程では、どうしても組織的な対応が不可欠となってまいります。一方、会員の活性化を図る視点からは大勢の方に連盟の運営に携わっていただくことが神漢連の飛躍に繋がります。そして組織的な対応を進める上での課題はふたつ、ひとつは仕事の細分化・区分の仕方、ふたつには現状の運営にあたっての規約や約束事との整合性をとることかと思います。前者は現状を適度の大きさ・単位に分割することで対応できますが、後者は執行理事とその業務に精通した新たな人たちの発掘と新たな役割分担です。

今回の導入の特徴は、現行の規約を変えることなく、その運営に精通した方々(運営委員)に入っていただいて執行理事と一緒になって運営して頂くことにあります。現在、執行理事は中山、岡崎、田原、桜庭、水城、城田氏および三上の7名、運営委員は川上、高津、中島、三村、室橋および吉岡氏の6名です。

具体的には、従来 田原健一事務局長がやってこられた運営業務を分割して会員管理、会報、会場手配、初心者入門講座、研修会、吟行会、総会・理事会、会計およびパソコンの活用や会員増強施策等新規案件対応の9部門に細分し、その各々に適材適所の方々にお願いしました。役割分担は以下の通りです。(敬称略)

会員管理：入会・退会・住所等一元管理
　◎三上、水城、三村、吉岡
会報　：年二回、各二百部
　中島、三村、吉岡
会場手配：総会、講座等会場の確保
　高津
初心者講座：会場確保、新聞社七社〈依頼
　◎桜庭、田原、高津、中島
研修会　：詩稿纏め等運営全般
　◎城田、水城、川上
吟行会　：企画、来賓予約、調査・実施
　◎三上、高津、室橋
総会・理事会：日程調整等運営全般
　◎岡崎、◎桜庭
会計　：連盟会計全般
　吉岡
新規案件：業務効率化、会員増強等
　◎三上、水城、三村、吉岡

現在、早速に活動を始めました。これからは今秋 新たに事務局長に就任される桜庭慎吾氏のご指導のもと上記の組織を挙げて更なる神漢連の飛躍に繋げてまいりますので、どうか会員の皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、現事務局長 田原健一氏の神漢連創立以来のご苦労に対して心から感謝を申し上げ、合せてこれからも連盟発展のためお力添えをお願い申し上げます。

神奈川清韻　漢詩集発刊

当漢詩連盟は創立五周年の記念事業として漢詩集を四月一日に発刊しました。

一人一首で八十八人の方々から作品が寄せられ、見事な詩集が完成しました。皆様のご協力に感謝いたします。

編纂は岡崎編集委員長のもと十一人の委員および中山連盟会長による最小限の確認、推敲のうえ、ご本人と相談し決定稿としたため、いささか時間がかかりました。

また窪寺先生に全般にわたり目を通していただきご批正を賜りました。

県連の総会後の懇親会において、石川先生と窪寺先生から幾つかの目立った作品に対して講評を頂きました。また県連理事による合評の結果、吉岡さんと中野さんの詩に対して高得点が与えられ、連盟の岡崎副会長から賞品が授与されました。

(中島記)

神代櫻　甲州客中作　吉岡昭夫

訪尋名樹養花天　訪尋す名樹　養花の天
擬視芳葩帯淡烟　凝視する芳葩　淡烟を帯ぶ
聞説其生凌鶴寿　聞説　其の生　鶴寿を凌ぐと
清容自若宛神仙　清容　自若として宛ら神仙

自学友見贈新米　中野国武

情味到来寒露晨　情味　到来　寒露の晨
開筐粒粒白于銀　筐を開けば粒粒　銀よりも白し
新炊薫満厨房裏　新炊　薫りは満つ厨房の裏
錦繍家山歸思頻　錦繍の家山　帰思　頻りなり

吉岡昭夫氏

感想を求められましたが、正直言って面映ゆいような申し訳ないような気持です。

といいますのは、採点の内訳では皆さんほんの僅かの差です。また他に、あるいはダブルで、石川先生や窪寺先生の評価を受けられた方々もおられます。ということは、「審美の基準」というのは必ずしも一元的ではないように思います。

次に、評価を受けられて当日感想を述べられた方々の中で、漢詩を作られてから私同様にまだ日が浅いと仰る方が、何名かおられたのでこれはある意味で励みになりました。

作詩の為には、韻や平仄、起承転結の構成、あるいは語彙の充実といった、技術的な精進も勿論大切と思いますが、もう一つ「感性」の練磨も肝心なように思います。日が浅くともいい詩を作られる方はこれが優れているように思います。「感性」は必ずしも技術の高さや経験の深さには拠らないかも知れません。

ともあれ、これを機会に一層精進したいと思います。有り難う御座いました。

中野国武氏

総会後の「神奈川風韻」の合評会において思いもかけず、表彰の栄に浴しました。感激しました。加えて、賞状の代りと言うことで、東北の塩釜の銘酒「浦霞」と岡崎副会長の関係された本二冊を頂戴致しました。感謝申し上げます。

この詩は、戦前の学生時代八年間、寮、下宿を共にした越後魚沼出身の友人から毎年出来秋の頃、新米が届けられることを詠んだものです。お互いに卒寿を迎える齢になりましたが変らぬ友情を大切に感懐にふけっております。有難うございました。

石川忠久先生講演録（二十三年度総会）

『自然を詠う詩　山の詩』

先程来の皆様のお話を伺ってまして、神奈川漢詩連盟は大変なものだと思いました。先ず、皆様は弁が立つ、層が厚い、これには本当に参った。この方式が全国に及んだら、全日本漢詩連盟は万々歳です。是非他にも広めて貰いたい。早速今日のお話に入ります。

「自然を詠う詩」は沢山あるが、今日は意図したわけではないが、絶句がなくて、古詩、律詩、それも全て五言になってしまいました。中味はいろいろあります。殊に詩の構成の仕方、対句の面白味が今日選んだ詩にはありますので、どうぞその辺をご覧下さい。

最初に陶淵明。この人は何と云っても自然詩の源流です。一番の先輩。西暦で云っても四から五世紀の時代の人でありまして、これからずっと自然詩の詩が唐の時代に流れていく。陶淵明から王維、常健と流れて行きます。

その前に謝霊運の詩を見ます。謝霊運は最近余り人に知られていませんけれども、当時では実は陶淵明より有名だった。ナンバーワン詩人だった。年齢は丁度20才若いということは、謝霊運には陶淵明の影響があるが、陶淵明には謝霊運の影響はないと云えましょう。

講演される　石川先生

その辺の問題は今日ははしょりまして、先ず陶淵明の看板の詩を見ましょう。陶淵明と云え

ば先ず此の詩と云う、ナンバーワンの看板の詩です。飲酒と云う詩が二十首ありますが、この「其の五」には酒は出て来ません。先ず読んでおきましょう。

飲酒二十首　　陶淵明

其五

結廬在人境　廬を結んで人境に在り
而無車馬喧　而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　君に問う　何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏　心遠ければ　地自ら偏なり
采菊東籬下　菊を東籬の下に采り
悠然見南山　悠然として南山を見る
山気日夕佳　山気　日夕に佳く
飛鳥相与還　飛鳥　相与に還る
此中有真意　此の中に真意有り
欲弁已忘言　弁ぜんと欲すれば已に言を忘る

これは古詩です。古詩の構成は四句ずつ、又は六句で切れる。この詩は四句プラス六句。後半の六句は又四句と二句に切れる。

廬と云うのは粗末な家のこと、自分の家を謙遜して云っている。人里の中に廬を結んでいるが、車馬の喧しさは無い。これは矛盾した考えで、人里に住んで居れば車馬の喧しさが当然ある。この往来の喧しさは、自分も出かけ、人も来る。人里に住んでいればそういう付き合いがある。従って、車馬の喧しさが当然にある。それが「無い」と云っている。何でか。一寸、君に聞くけれど、と自問自答しています。どうしてそういうこと(人里に住んでいたら当然にある車馬の喧しさ)が無いのか。

その答えは、心が遠ければ地は自から偏となる。つまり、心の持ち様だと云っている。心が世間から遠くあれば、住んでいる土地は自然に辺鄙になる。物理的な問題ではなく、精神的な問題だと云っているわけです。極端な云い方をすると、銀座四丁目に住んでいても隠者の生活は出来る、自分で付き合いを避ければ良い。これは何気ないことのようで、この時代の精神を実に良く表している。と云うのは、陶淵明は実は貴族です。三流ではあるが貴族です。この詩は貴族社会に見せているのです。作り手がこの詩を誰に見せるかは大事なことで、今日だったら不特定多数の読者を詩人は意識するだろうが、彼は特定少数者に見せようと思って作っている。社会の狭い貴族社会の中でこういう生活をしている人は極く少ない。彼は四十一才の時にさらりと宮仕えを辞め、自分の故郷に帰ってきた。と云っても実は本当の故郷に帰っていない。そんなことをしたら、詩の発表の機会は絶無になってしまう。この詩が残っているのは発表する場があったからです。陶淵明の時代の都は南京でした。この人は南京から少し揚子江を遡った処の江西省九江の詩壇で活躍した。もう宮廷の官職は離れて、自由に生きている。その自由に生きていると云うことをこれ見よがしに詠っているのです。俺様は山に住んでいるわけではなく、街中に住んでいる。それでもこのような生き方が出来るんだぞ。悔しかったらやってみろと云う詩なのです。実際問題として貴族は爵位とか、官職の位とかが大切で、それにしがみついていなければならない。貴族と云うのはそうしたものがあって始めて貴族なわけです。それを棄てるということは非常に危険なわけで、下手をすると、人間と云うのはそうした誰しも振り向かないような存在になるのは恐い。彼はそのリスクを敢えて犯したのですが、「詩」と云う武器があった。詩を読ませることによって貴族社会での存在が保たれた。もし彼に詩の才能が無かったら、さらりと辞めたらそれっ切りです。誰も知らなくなる。彼はそうならない自信があった。四十一才の時に辞めても、詩で以って立つと云う自信、事実詩壇の領袖として活躍しました。こういう詩を作って、どうだ、と見せる。都会に住んでいるけれども、精神的には遠く離れ立た地に住んでいる。そこでどういう生活をしているか見せてやる。これが最初の四句。次がその見せてやる内容です。

五句六句は十句全体の真ん中で、この真ん中に山が来るように作る。だらだら長いだけでは駄目で十句にして真ん中に山を持って来る。もっと長い詩の場合は山を二つ作る。その例は白楽天の長恨歌などに顕著に出ている。あの詩は百二十句もあるが全然だれていない。緊密な群を作って構成して組み立てている。この詩十句の詩であるので、真ん中五、六句目に山を持って来ています。

東の籬の下で菊を摘む。季節感が出ている。「籬」と云う言葉によって住んでいる家が粗末であることを示している。もし、金殿玉楼のような立派な家に住んでいたら、塀も立派な塀とな

る。併し俺の家は籬だよと云う。本当に籬だったかどうか、それは分かりません。詩人は本当のことばかりを詠うとは限らない。これは詩の世界ですから、俺の今居る心の世界を皆に知らせようと。さて、菊を何故摘むか。これは花を見て、ああ美しいなと思って飾るために摘むのではない。食べるのです。当時は菊の花は漢方薬として重要なものだった。これを食べてお腹の虫を殺して、長寿を図ろうと云う漢方薬。「菊を采る東籬の下」と云うのは、そういう意味で、決して観賞用の菊を摘んでいるのではない。そうして、「悠然として南山を見る」。これにもいろいろな説がありますけれども、南の山を悠然と見ると云うのが普通の説ですが、「悠然」は「南山」にかかると云う説もある。「悠然たる南山を見る」。自分が悠然としているのではなく、山が悠然としていると。ゆったりとした山、山はその姿を変える事は無い。それに引きかえて人間は年を取ってやがて死ぬ。ですから、南の山は長寿の象徴なのです。これは「詩経」の詩の中に詠われている。古く三千年も昔の詩が入っているのが詩経ですがけれど、その中の小雅、「天保」と云う詩に「南山の寿長くして、騫けもせず崩れもせず」「南山のようにありたいなあ」と云う句がある。詩経を作った人々は、現在の西安という街があるが、当時は長安といった。長安の南に秦嶺山脈がある。それを見ていたのです。見ていると、いつも何時も同じような形をしてたたなわっている。「いいなあ、騫けもせず崩れもせず、あの南山のようにありたいなあ」そう云う詩を詩経の時代の人達が詠っている。それを利用した。実は陶淵明の故郷から見える山は南山ではない。彼は山の東側に住んでいたので西の方に見える筈ですが、敢えて彼が「南山」と云う言葉を使ったのは、詩経の人々が使った意味を生かそうとした。ですからこの「悠然として南山を見る」と云う句は先の「菊を采る」の句と関連している。菊を摘んで長寿を図る。そして南の山を見て、ああ南の山は悠然としているなあ。すると陽が暮れて来た。「山気日夕に佳く」、この日夕と云う言葉も詩経に詠われている言葉でありまして、古い詩語です。日の夕、夕暮れがとっても佳い。一寸ここで気を付けていただきたい。原文の方を見てください。原文の方は「悠然として南山を見る」、そのつぎは「山気」と云っている。これは分かち書きをしているから気が付きにくいが「山」が続いています。続いていると云うことは、ここで切るなと云うことです。「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る、山気日夕に佳く」と続けて読め、この四句はつがっているのだよと。「南の山を見て悠然としていて、良いなあ、夕暮れ時になるとカアカアと烏が帰っていく。「山気日夕に佳く飛鳥相い与に還る」、この何気ない情景の中に本当の意味がある。人生の本当の意味がある。つまり、人生如何に生くべきかと云う永遠の命題があるわけで、これに対し、陶淵明なりの解答を出している。ここに人生の本当の意味がある。それは口に出して弁じようとしても言葉を忘れてしまうから云えないよと。これを判りたかったら、俺と同じような生活をしてみろと突き放しているのです。つまり、この四句に盛られている人生の真意は何かと云うことは読者にゆだねられているわけですけれども。

私なりに考えれば「菊を采り南の山を見る」には、長寿の願望があり、人間は長生きしたい。それともう一つ「日暮れ時に烏が連れ立ってカアカアと還って行く」。塒へ帰ったら何をするか。これは休むのです。烏は飛び疲れたら塒へ帰って休む。そのように人間も矢張り時が来たら休めと云うことです。この二つのことを陶淵明はこの短い詩で云っていると思います。これを直接長生きしたい、疲れたら休めと言ったのでは理屈になってしまう。そうではなく、こういう情景を見せて、自然に分からせる。ああなるほどなあと思わせる。こういうのが詩人のセンスなのです。短い言葉の中で人に深い思いを抱かせる。これはたやすいことではない。この詩は本当に良く出来た詩です。酒のことは全く出て来ないが、真意と云うのは、菊の花を摘んだら酒に泛べて飲む、酒のことを直接詠っていないけれども、菊を摘んだら自然に酒に泛べて飲むことになる、そこら辺りに酒の影がある。

廬を結んで人里に住んでいるけれども
車や馬の往来の喧しさが無い
自分も出て行かないと、人も来ないのだ
どうして君、そんな事が出来る
この社会に生きていながら
この貴族社会から心が遠く離れているからだ
そうすると自分が住んでいる処がどこであっても
辺鄙になってしまうのだよ

俺の生活を見てみろ
東の籬の下で菊を摘んで
悠然たる南の山を見てあのように長生きするのだ
山の気配がぼーっと、山が墨のように霞んでいる
その日暮れの靄の中を烏がカアカアと云い乍ら帰って行く
一羽でなく、連れ立って帰っていく
そして家族団らんしている
この中に本当の意味があるぞ
弁じようとしても言葉を忘れてしまうから
分かりたかったら俺と同じ生活をしてみろ

傲然とした囁きですね。何遍も云いますけれど、彼はこういう生活を本当にしていたと考える必要はない。それは別の問題。こういう詩の世界を見つけてそれを人に示す。詩の世界です。

韻は「喧」「偏」「山」「還」「言」と踏んでいます。

（住田笛雄記）

（尚、この続きは次回会報に掲載を予定しています）

春の研修会を終えて

城田六郎

本年度の研修会は六月十五日と二十八日の二グループに分かれ、それぞれ十八名と二十四名の参加を得て活発に行われた。

今回も従来同様「選句方式」が採用された。田原事務局長の司会よろしきを得てスムーズに進行したが、Bグループ二十四名はやや多すぎて、時間不足の感を免れなかった。次回以降の検討課題である。

今回とくに感じた事は、出席者も顔なじみとなったので、遠慮のない意見が簇出したことである。切磋琢磨を目指す研修会の主旨に合致して大変結構なことである。作詩の意図を他人に理解してもらうことは、なかなか難しく、とくに自己流の造語や和習が混じっている場合にはなおさらの事である。

今回Bグループの研修会には、窪寺貫道先生が傍聴されて最後にいくつかのコメントを頂く事ができました。そのうちの一つをあげれば「辞書を良く見よ」である。

（城田記）

両グループの最高点の作品を紹介します。Aグループは十一点が二人でした。

偶成　　田原健一

皇京依約坐茶房　窓外通衢車馬忙
後輩頻談塵務事　珈琲酸味舊知香

耄耋楽垂釣　　内村才五

四顧遥望物候妍　晴光滄海白鴎天
潮風習習漁歌近　泰日垂綸自浩然

Bグループは内村さんが十三点、十一点が二人でした。

耄耋楽垂釣　　内村才五

波光瀲灩漾潮香　凝視垂緡入睡郷
游蕩龍宮胡蝶夢　艶姫列侍太公望

游菖蒲園　　古田光子

初夏名園緑樹連　菖蒲繚乱競清妍
賞花覓句歩幽徑　絲雨空濛濃紫鮮

壽福寺展實朝政子墓　城田六郎

隔絶俗塵常閉門　飛甍鬱樹蘚庭昏
碧巖穿窟五輪塔　蝋涙凋花香篆痕

AとBグループの両方で最高点を得られた内村さんの感想です。

内村才五氏

下手な鉄砲も数撃ちゃ当るです。

「紛れ当たり」という言葉がありますがこの度は、私奴がその幸運を射止めてしまいました。

入門書に「他作多捨」とありましたので、なるべく多く作るように努めて参りました。それが良かったのか定かではありませんが兎に角今回最高点という幸運に恵まれました。元来私は学がありませんので此の世界に紛れ込み、果た

して蹤いてゆけるか自信は無かったのですが、漢詩なるものに無性に惹かれ横浜のカルチャーセンター教室、窪寺貫道先生の門を叩きました。

以来、遣れば遣るほど面白さが増し、時には遊び仲間の誘いも断ったことも度々。識らなかった世界を手探りで約束事に縛られながら悪戦苦闘し、何とか一詩をまとめた時の云い知れぬ快感は例えようのないものがあります。

窪寺先生が、初めは自然の風景を写生するようにと諭されました。そのお教えを忠実に守ってまいりました、が偶に余計な事柄等を交えると必ず〝再考〟の御朱筆を頂戴いたしました。

住居が三浦半島突端の油壺ですので自然の風光に恵まれているのが追風といえるかも知れません。加えて以前の住処も丹沢山塊を控え古寺名刹が多く、乳牛農家のサイロの点在する牧歌的な伊勢原でしたので詩材に事欠きませんでした。

或るときは丹沢山中に分け入って仙人になりすまし、又或るときは城ヶ島の磯に釣糸を垂れ太公望を気取ったり、一作一作が愉しくて堪らないといった具合で、洵に幸せな老後を迎えることが出来たとつくづく感じ入っております。

向後益々努力を重ね出来得るならば三千年の後の世に、詠み人知らずでも結構！愚生の詩がその時代の人々に読んで貰えれば！が自惚れた願望であります。

総会で挨拶される岡崎副会長

県連から研修会参加のお誘い

研修会の選句方式とは、一人一句を投稿し全員の句を一表にして（名前を伏せて）事前に配布します。当日、全員の前で一人持ち点五点として自分の句以外に投票するものです。得点は黒板に正の字を書いて公開し高得点の人から名前の発表、本人の弁、質問、議論と進行します。

この方式は手間と時間が掛りますが、いささかの緊張、そして誰がどの句に投票したかが分かるのが面白いことです。そして皆さんの意見や蘊蓄なども出てこれも勉強になることです。まだ参加したことのない方は一度、気軽に参加ください。初心者もかなり参加されています。

Eメールアドレスをお持ちの方へ

当連盟の会員も百六十名を超え、連絡のための手段は郵便、電話などだけでは益々繁忙になってきました。連盟と会員の連絡の迅速化と合理化のため、Eメールアドレスをお持ちの方でご協力頂ける方は　同封のハガキにアドレスをご記入下さい。当連盟との連絡のみに使用するもので、一覧表にして会員間に公開することはありません。

（中島記）

第五回初心者入門講座の感想

飯島敏雄

工業高校時代古文と漢文の担任だった先生がどこか気が合うところがあったのか可愛がって下さり、先生の授業には人一倍興味を持ち、図書館で参考書を借りて予習をしていたので、その予習していたことと先生の話のどこが違うか比べながら聞くなどして非常に楽しい授業でした。特に漢文の授業では荘子と陶淵明に心惹かれるものがあり、その五、六年後の大学院生の時は一戸建てのアパートの周りに柳を植えて、陶淵明の五柳先生伝にあやかって「五柳道人」と号をつけ、一人心酔していた。それから四十年、結婚や大学で工学関係の教育と研究に携わっていたことなどから現実生活に追われ陶淵明の桃源郷のような世界を味わう余裕をすっかり忘れ、二年前に退職して時間に余裕が出来たときに改めて、趣味として短歌、俳句、漢文のどれかを勉強してみたいと思いましたが、それもなかなか始められずにいました。そんな

折に本講座の四回生で、かつ勤務先の大学で同僚であった川上修己さんから「第五回初心者入門講座」が四月から開催されるのでどうですかとのお誘いを受け、それが縁で漢詩に取り組むことになりました。高校の時は漢詩の決まりは字数と句数および韻を踏むことだけだと思っていましたが、初回の講座で漢字には平仄の区別があり、かつそれを句の中で規則に沿って並べなければならないこと、韻もただ字の発音の韻母が合っていれば良いというものではないこと、その他詩語として使える語句があることなどを講座の中で学習し、漢詩を作るのは簡単ではないと感じました。そして三回目の講座からは「春」という課題を与えられて七言絶句を作ることになりました。詩語集から字句を選ぼうとしても適当なものが見つからず、またそれとは別に自分の言葉を入れようとして字の小さな漢和辞典を引くと意味は合うが平仄が合わなくてその字は使えないなど悪戦苦闘の連続で、あっという間に夜中の二時、三時になり、「余り無理をしてはだめ！」と家内に何度も怒られました。講座の最終回は各自の作った漢詩の発表でした。他の方の作品に比べると自分の作品は詩というよりも文のようで、何か「ぴしっときまった」感じがしないと反省させられました。しかし未だ稚拙なものしか作れませんが漢詩作りに一歩踏み出すことが出来たことは自分としては満足で、今後はできるだけ沢山の漢詩に触れ、自分で使える語彙を増やしていかねばと、家内にまた買ったのと言われながら漢詩の本を買いまくり，それを乱読しています。六回の短い講座でしたが先生方には懇切丁寧な指導をしていただき深く感謝申し上げます。また多くの方々とお知り合いになれたことも今回の講座での大きな収穫でした。

東日本大震災の漢詩

三月十一日の東日本大震災は、それに伴って起こった原発事故と相まって、今までに例を見ない大惨事で、4ヶ月経った今なお復興が十分に進んでいない現状にある。　窪寺先生が災害を悼んで五言古詩を詠んでおられるが、多くの連盟会員の方々も同じように災害を悼んだ詩を発表しておられる。　岡崎副会長がこれらの震災関連の詩を集められたので、ここにまとめて示し、被災地で日々ご苦労されている皆様方への哀悼と激励の気持ちとしたい。

尚、震災関連の詩は研修会でも多く取り上げられ，Aグループで五篇，Bグループで二篇あるが、これらは十分な推敲が済んでいない詩もあるので、ここでは割愛した。　（三村記）

辛卯東日本大震災発生偶感

窪寺貫道

鼇載五山久　鼇は五山を載せて久しく
天柱地維完　天柱地維は完し
何図一朝變　何ぞ図らん一朝にして変ず
鼇顚柱維残　鼇は顚じ柱維 残わる
坤元九級震　坤元 九級に震い
海嘯即遠看　海嘯 即ち遠く看るも
千村還萬落　千村 還た万落
刹那任狂瀾　刹那 狂瀾に任す
大堤崩汀渚　大堤 汀渚に崩れ
快車転陌阡　快車 陌阡に転ず
無數遂浪屋　無数 浪を逐う屋
幾百航陸船　幾百 陸を航る船
潮去瓦礫阜　潮去り瓦礫の阜
尸骸不知員　尸骸 員を知らず
親子空相索　親子 空しく相い索め
滄桑發眼前　滄桑 眼前に発る
剩困原子厄　剩え困ず原子の厄
誰鎖沃火酸　誰か鎖さんや妖火の酸たるを
此凶何故降　此の凶 何の故にか降る
人疏天為天　人は疏んず天の天たるを

東北關東大震災

花田裕

三陸磐城襲震災　即望海嘯遡灣來
瞬時街巷化荒土　萬落千村壞屋堆

福島異變

田原健一

火龍震怒不能羈　吐爛放氛牢外窺
惶駭村村棄家遁　畏聞馴養僣人爲

東北關東大震災即事

酒井謙太郎

地搖波湧恣騰奔　壞屋掠人災禍痕
筆舌難描悲惨極　毎看電視只忘言

東日本大震災　　城田六郎

戴地巨鼇千里奔　拍天海嘯萬家呑
路旁頽屋有人語　旬日飢寒媼與孫

東日本大震災偶成　　圓谷照男

海哮地裂咎殃中　田宅人車一瞬空
尚有遊魂萬餘嘆　被災黎庶夢興隆

東日本大震災小景　　岡崎満義

海邊荒土幾牛馳　空浴春風食草姿
原子妖氛籠一帶　牧夫不見去何之

素書とは何なり

岡崎勝郎

私の枕辺に渡辺精一訳註「素書」(明徳出版社)一冊がある。これがなかなか曰くつきの本なのである。二百頁の薄冊だが巻頭で渡辺氏の解説が略四〇頁に渉る。これによると始皇帝の乗った輦に子房が鉄椎を投げつけて遁げ、圯上で老人に出会いそこで老人から授けられた書物がこれというのだ。史記ではこの書のことを太公兵法といっているが。

子房はその足で沛県の劉邦のもとに参じ二十年後、漢王高祖(劉邦)の功臣張良となる。時代下がって前漢から後漢へ替る赤眉の乱のとき、野盗が張良の墓を発いた。この時棺の中から出てきたのがこの書で、それが人間への触れ始めとなったという事情。

晩唐の頃、杜光庭が自書「仙伝拾遺」に“後人その書を謂いて老人の称す黄石に符して黄石公書と為す”と記した。

その書を謂いてとあるようにこの書は実在したと考えられる。更に時代下がって北宋の代、この書は三略または黄石公素書たんに素書と名称を替えて、実際の原本の有無とそれに亦夥しい古書の内のどれが其なるやも判別しがたい侭になっていた。

歐陽修は「新唐書」で枕中素書としてこれを名指しし、蘇軾は素書の存在は認めていたらしい。勿も黄石公には首を傾げ“不問黄公覓素書”と七絶に草している。

書名の目録は有って実本が無い、実本にたいして複数の書名などの紛らわしい例は中国ではめずらしくないようだ。

処がここに張商英なる人物が「黄石公素書」を自ら撰(著)して刊行したのである。学者達による論及が沸騰したのは実にこの北宋の代である。私が手元にする素書が即ちこれで、その序文には二百年前に杜光庭が記した事柄がまるでその侭述べられている。

盗の子房の塚を曝きし折、玉枕の中にこの書を獲たり、凡て一三三六字(ここまで杜の記)上に秘戒あり不道不神不賢の人に伝うるを許さず(商英)と記されている。

本文は比較的短文の章でなり、これに商英の註釈括弧つきで符される。一例すれば、危国無賢人、乱世無善人〔非無賢人善人、不能用故也〕――賢人無きに非ず用いる能わざるが故なりと商英の註釈である。訓話文に註釈即ち解釈の諸相といった形。ただ如何せん訓話文が悉く春秋戦国の諸子百家の文辞、所構わずの剽窃である。

当代の学者の多くがこの著を「膚語剽拾なりとして呵って斥く」(黄震)とした。明代の胡応麟は「黄石公素書は宋代の張商英の偽撰せしもの」と断じた。わづかに南宋の代に朱熹(朱子)は商英の関わりした素書の原本の存することを信じていた。つまり素書の本文まで偽撰したとは考えていない。かたをもつ学者もいたのである。

識者の多くから反故にされてしまった本。商英には気の毒だが見方を変えれば誹謗されることで誹謗した相手を虚仮にする屈折した報復を、私はこれを魯迅の詐術めいた筆法をこの人商英に勘ぐる。青史に列せられるのであろう詩文英才の幾人かを傍らに見て、顧みて己れの不如意からの鬱勃たる対抗心を。

さて、素書原本果たして実在したかどうか。

子房の訊ねに老人はあの山の麓に黄色い大石がある、それが儂じゃと応えた。渡辺氏は概ね原本の実在した側に立っている。

盛唐の李賀に秋水釣紅渠　仙人待素書の詩があり、元稹に偶然遊女暫相親　素書三巻留為贈の律詩がある。そういえばあの非攻の墨翟も周狄山で神人から素書を授けられたと聞く。仙人が人間に書を贈るという古来の伝説があったのかもしれない。

ここで張良を再度引き合わそう。功臣終には奸臣と讒せられ、商鞅・李斯の如く命を絶やす例の多いなか、張良は後年“嗜を絶ち欲を禁づ

るは累を除く所以”と、遠地の小領主となり、自ら隠士となして生を全うした。
牀上で往生し黄石老人から授かった書を共に棺中に納めせしめたのである。以為らく盗がかれの墓を発いたのが抑の発端であった。

題黄石公素書

商英倏忽遺奇篇　剽窃無稽智者捐
坡老何為斯枕側　倣哉李賀慕神仙

柳宗元詩選 を読む　　城田六郎

本年五月に「柳宗元詩選」が岩波文庫より刊行された。柳宗元の詩は幾つか詠んだことはあるが、体系的に鑑賞したことがないので早速講入した。
彼は三十三歳の時、永州〈貶謫され、十年後に更に南の柳州に貶謫されて四年後に其の地で病没した。
柳宗元の詩は貶謫の文学である。山水を愛でることで貶謫の苦悶を乗り越えようとした態度が永州時代の詩であり、切々とした心情を吐露するための長詩が多い。その中で無心の境地を獲得したものが有名な次の五絶である。

江　雪

千山鳥飛絶　千山　鳥　飛ぶこと絶ゆ
萬徑人蹤滅　万径　人蹤　滅す
孤舟蓑笠翁　孤舟　蓑笠の翁
獨釣寒江雪　独り釣る寒江の雪

この詩選には大きな特色がある。通常の詩選は語釈と通釈のみであるが、訳者　下定雅弘氏はさらにそれぞれの詩の背景について、多くのページを割いている。我々初学者が少しでも真髄に触れられるように配慮されているのが嬉しい。

秋の吟行会

江の島の詩碑を訪ね
展望灯台から太平洋を一望しよう！

□日時　　9月13日(火)　10時～16時
□集合場所　江ノ電「江ノ島駅」
または小田急「片瀬江ノ島駅」改札口前
10時集合
両場所とも役員が待機します
(江ノ島をバックに全員で写真撮影予定)
□行程　　後藤新平詩碑→ 中津宮→展望灯台→服部南郭詩碑(希望者)
□昼食及び懇親会「かながわ女性センター」
13時～16時
□柏梁体　　韻字と用紙は集合時に配布、散策途中に作って下さい。
懇親会で石川先生に選んで頂き、秀作を披露します。
□参加費　3000円(昼食代・エスカレータ代・展望灯台登乗費)
□申込み　同封葉書にて8月20日までに返事を下さい。　　(高津記)

平成22年度決算実績と平成二十三年度予算

5月18日の総会で承認された決算／予算は左表の通りである。郵便局今期末残高　18万4千円。

[収入]			[支出]		
費目	23年予算	22年実績	費目	23年予算	22年実績
会員会費	260	254	通信費	55	52
懇親会費	300	250	懇親会費	280	237
研修会参加費	40	37	印刷コピー費	55	53
詩集頒布代	50	3	文具雑品費	25	28
寄付金	40	32	会場関係費	100	97
その他	10	28	詩集発行費	168	0
			郵便局振込み	10	10
			その他	7	45
合計	700	604		700	522

今年度後半のスケジュール”　カレンダーに予定を記入しましょう

一、秋の研修会

従来と同じ「選句会方式」を採用。　2グループに分けて実施します

都合のいい日を選んで下さい

・時期　Aグループ　10月11日(火)　午後1時～5時

　　Bグループ　10月27日(木)　午後1時～5時

・場所　神奈川近代文学館　2階会議室

・申込　同封の返信用葉書にて　申込期限　8月20日(土)　必着

・詩稿提出期限　A，Bグループ共に　9月20日(火)

・詩稿提出先　〒259-1304　秦野市堀山下600～9　水城まゆみ宛

（注意）詩稿提出先の住所は申込葉書(同封)と異なりますのでご留意下さい

二、新人フォローアップ研修会

春の初心者入門講座に参加された方を中心に新人研修を行います

・時期　10月5日(水)　午後1時～5時

・場所　神奈川近代文学館　2階会議室

参加者は自作の七絶一首、そのコピーを　30部持参下さい

三、秋の吟行会

今回はまだ夏の薫りが残る「江ノ島」の散策です　詳細は　11ページを参照下さい

・時期　9月13日(火)　午前10時集合

・場所　江ノ島電鉄「江ノ島駅」　または小田急電鉄「片瀬江ノ島駅」改札口前

（両場所とも役員が待機します）

・昼食　神奈川女性センター

・申込　同封の返信用葉書にて　申込期限　8月20日(土)　必着

・費用　3千円

『編集後記』

五月の総会で新しく導入された運営委員会制度の下での初めての会報編集である。五月末の委員会で、中島龍一、吉岡昭夫、三村公二の三名が会報編集担当に決まり、早速編集作業に取り掛かった。

昨年までは、七月中旬には皆様に会報が届いるので、発刊までに後一ヶ月しかない、その上、編集の具体的作業をマスターしていない、掲載予定項目が多いのに原稿依頼が済んでいないものがあるなど、無い無い尽くしの中で、パソコンと格闘し、戸惑いの連続の中で、漸く発刊にこぎつけた。

出来上がった会報の初刷りを見ると、いろいろ気にかかる不出来な箇所が散見される。しかし、それを再修正する時間も無いので、今回はそれをそのまま皆さんの所にお届けする事になってしまった。不出来は初めての編集だと言う事でお許し願いたい。

それにしても、この仕事をこれまでお一人で担当してこられた田原事務局長のご苦労にはあらためて頭が下がる思いである。引き続きご指導いただきながら、新人三人組もこれから頑張るぞと申し上げて編集後記としたい。

尚、会報題字は石川省吾理事にお願いし、編集者交代を期に一新した。今後、会報の題字はこれを使わせていただきます。

（三村記）